

まんだら通信

第174号 (通巻206号)

平成22年(2010)12月 佛誕2576年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

今年もスリランカ

成田山幼稚園開設二十周年記念式典

首都コロンボから、日本でいえば国道一号线のキャンディロードで一時間。ニッタンプローワの町のランポクナガマに、スリランカ訪問のたびにお世話になる幼稚園があります。

二十年前、愛知県犬山市の成田山名古屋別院の菱木主管が、広大な敷地の払い下げを受けて、大変な苦勞の末開設しました。採用された先生はすべて、日本で一年間の研修を受けてから帰国し、園児の教育に当たったということです。

入園希望者には、外国にありがちなコネや人脈を認めず、公平になるようにすべて抽選だそうで、この辺りにも日本人の律義さが表れていて、日本への信用を高めています。子どもたちは現在四百五十人で満員状態とのことでした。

敷地内にはまた、犬山ライオンズクラブがプレゼントした、二百〜三百坪はあるのかという大集会場が併設されていて、地域のセレモニーホールとして、色々な催しに活かされています。



上の写真は国旗掲揚の様子で、右上の隅に日の丸がちょっとだけ見えます。

鼓笛隊が君が代の演奏をし、みんなで斉唱します。普段の朝礼でも、園児が国歌を斉唱したあと、両国の国旗を掲揚し国歌を斉唱しますが、外国でさえこれほど大事にされている日の丸と君が代を、殊更邪険に扱う自分の国と考え合わせて、いつも胸が熱くなります。

そういうえば、この近所で祝祭日に日の丸を掲げるのは、このお寺と高山神主さんのお家だけのようです。

集会場は二階席まで一杯の超満員ですが、記念式典といっても挨拶など退屈な話がある訳ではなく、主に園児達の歌や踊りが続きます。

名古屋別院と犬山ライオンズクラブの人たちと私たち来賓は、国の偉い人と一緒に一番前の席で見せてもらいましたが、園児達が堂々と、しっかりとしていることに感動しました。

園児の代表が可愛い着物姿で、日本からの私たちにお礼を言ってくれましたが、真つすぐ前を見て言いたいこともなく話し進める姿に、とても入学前の子どもとは思えない頼もしさを感じました。

つい、如何にも自信なさそうにうつつむいて原稿を読む、日本の菅総理大臣を思い浮かべてしまいました。

奨学生との夕食会

帰国の前の晩、同行の十人でお金を出しあって、二十五人の奨学生と親ごさんたちを呼んで夕食会をしました。挨拶は大の苦手ですが、アンギーさんが許して

くれず、是非にといわれて次のような話をしました。

「日本のおかげで、アジア諸国はみな独立した。日本と言うお母さんは難産して母胎をそこねたが、生まれた子供たちはすくすくと育っている。今日東南アジア諸国民が米英と対等に話ができるのは一体誰のおかげであるか。それは身を殺して仁をなした日本と言うお母さんがあったためである。十二月八日は我々にこの偉大な思想を示してくれたお母さんが、一身を賭して重大な決心をされた日である。我々タイ国民はこの日を忘れてはならない。」これはタイのククリット・プラモード元首相が1955年6月、タイのサイアム・ラット紙に寄せた言葉ですが、太平洋戦争は、植民地として虐げられている世界の国を、白人国家から開放する戦いでもありました。困難に立ち向かうためには国民が一つの心にならなければなりませんし、正しい判断をするには教育が大事です。皆さんもしっかり学んでスリランカと世界の役に立つて欲しいと思います。と。



白と黄色の端正な形と乙女を思わせる清純な香り。地中海沿岸からシルクロードのオアシス伝いに、遥々越えてこの国に来たのは、昔の人たちもこの野草の美しさに魅かれたのでしょうか。属名のナルシッサスは、泉に写った自分の姿に恋い焦がれて死んだ、ギリシャ神話の青年の名前とか。◆スリランカ特集のようになった今月号ですが、紙面の余裕がなく、書ききれない方が多いです。紫雲寺のホームページに載せるつもりですので、そちらの方もどうぞ宜しくお願い。

2010.12.09 龍渉



手渡すところを見ていた、一緒に行った皆さんはその場でお金を出しあって、アンギーさんに渡しました。元金は毎年増えて、現在約165万円ですが、もうひと踏ん張りしなければと思います。という訳で当分の間、『まんだら通信』にご援助戴いている分も『あそか基金』に使わせて戴きたいと思っております。◆何回か取り上げたスイセン【ひがばな科スイセン属】です。今年は開花が1ヶ月近く遅れて、つい先日咲き始めました。太陽が恋しくなる頃、日だまりのそこそこにこの花が咲き始めると、今年ももうすぐ終わるなあ気がきます。

◆“牛に引かれて善光寺参り”ではありませんが「まんだら通信、読んでるよ〜」という声に励まされて、よたよたながら今年も何とか続けました。本当に有難うございます。どなたも風邪など引かず、新しい年をお迎えになりますようお祈り申し上げます。◆『あそか基金』は、スリランカの銀行に預けた定期預金の利息で運用しています。最初14%でしたが最近では半分の7.4%になり、奨学生の数を減らすことになってしまいました。今までもらっていて、急に受け取れなくなったお子さんの気持ちを思いやると、こちらがやるせなくなります。

余滴

につぼん人情小噺 三遊亭鳳豊
第五十九話 グループホーム

えー、今年ほどお年寄りのことが問題になった年はありませんね。

戸籍上、まだ生きていっていることになっている人とか、亡くなったのを隠して息子や娘が年金を受け取っていたとか。なんだか、淋しい世の中になりましたねえ。

また、ひとり暮らしのお年寄りのなかには、何日も人と話したことがなく、「オレオレ詐欺でもいいから電話がかかってこないか」と思っている方も実際、いらつしゃるんだそうですね。

私が子供の頃には、どの家にもだいたいおじいちゃん、おばあちゃんがいましてよね。そして、何より、このお年寄りたちがいろいろなことを実によく知っていました。

おばあちゃんもいろんなことをよく知っていましたね。孫がよく聞いてましたよ。

「おばあちゃん、お餅にカビが生えてるよ。なんで、カビがはえるんだろうねえ」
「おめえが早く食わねえからだ」

実は、私も九十歳の母親かおりました、妻が介護をしております。いやー、かみさんに私は頭があがりませんね。名もなく貧しく恥ずかしく、でございませう。

でも、母親は世話されていることにまったくおかない。私の母親ですからね、「息子の心、親知らず」。実に勝手な注文をするんです。

「港の岸壁に行きたいねえ」なんていうから、自殺でもするのか、と思つて心配すると、「あそこはいいんだよ。波がね、私の名前を呼んでくれるんだよ。バッチャー、バッチャー……」

今日は、私の母親と同じくらいのお年寄りが仲よく暮らすあるグループホームでの出来事をご紹介します。

こぎれいなグループホームに、九十二歳のおばあちゃんが皆さんとなかよく暮らしておりました。

しかし、やはり年齢から来るものでしょうか、かなり認知症が進んでおりました、家族が遊びに来ましても、それが自分の娘やら孫やらわからないこともしばしばあつたそうですね。誰とも話さず、ただ静かに窓から外の景色を見ている。でも、このおばあちゃん、着ている着物や何気ないしぐさに品がおありで、グループホームのなかでは、謎のおばあちゃんでした。本人から聞いた人の話によると、「私は昔はいい家に住んでいたのよ」とおっしゃるのですが、なにぶんにもボケているので真偽のほどは誰も知りません。

そんなある日のこと、八十代のひとりのおばあちゃんが新たに入所をしてきました。家族に連れられて来たのですが、この方もかなりの認知症で、家においでいると台所で火を使つたりするのであぶないという理由で、無理やり連れて来られたようでした。

「みなさん、よろしくお願ひいたします」と家族は挨拶をして、おばあちゃん一人置いて帰っていきました。
「はい、皆さん、ここに集まってください」

最初にお話しした九十二歳のおばあちゃんも、ダイニングルームに集まり、いつものように、黙つて、新しい仲間を迎えます。

と、その時です。新しく入所したおばあちゃんが、突然、その九十二歳の品のいいおばあちゃんに駆け寄り、土下座をしたのです。

「奥様、奥様ですよ。竹崎の奥様ですね。私、あなたさまの次女の愛子様のお世話をさせていただいた者でございませう。ながのご無沙汰でございました！」

周囲の人たちは唖然としたままだ。なにしろ、認知症の人たちが集まっているのですから、スタッフも様子をただ見守るしかありませんでした。

すると、九十二歳のおばあちゃんが今まで見せたことのない満面の笑みを浮かべただけでなく、なんと、言葉を発したじゃありませんか。

「あら、シーちゃん。あなた、シーちゃんよ。元気だったの。よかつたわ。あなたが姪っこさんに引き取られて行つたという噂を聞いたからどうしたかと心配してたのよ。シーちゃん、元気でよかつたア……」

「奥様ア、奥様アアア」
「シーちゃん、死ぬ前に会えてよかつたア。私、ここに来てから、死にたい、死にたいと思つていたのよ」

シーちゃんと呼ばれたおばあちゃんもしわくちゃん顔をさらに崩して、「奥様アア」と何度も泣き叫んでいたそうです。その光景は、まるで認知症を感じさせません。

その後、スタッフが聞いたところによると、この九十二歳の奥様は戦後、没落したとはいえども、戦前はかなりの大金持ちの奥様で、子供ひとりひとりに、子守がついて、世話をしていたそうで、シーちゃんはやはり次女のお世話係だったそうです。

ということは、六十年ぶりの再会でしょう。もちろん、その次女も話を聞いて、グループホームを訪ね、シーちゃんと再会したとのこと。

ちなみに、いまはこのシーちゃんがせつせと竹崎の奥さんの面倒を見ながら、ふたりでグループホームでの生活を楽しく送っているそうです。

認知症は、まるですべての記憶がないかのように思われていますが、実は、楽しい思い出や若い頃の記憶は蘇るといふことを、このふたりの「再会」が教えてくれました。そしてそれ以来、このグループホーム全体が活気にあふれたといひます。

うちの母にも聞きました。
「おふくろ、若い頃を振り返つて、いまどう思つてる？」
「ああ、私の人生で最大の失敗はねえ、あなたのお父ちゃんと結婚したことだよ」
まだ、母はボケていない、と思ひました。



ツルミガマ 成田山新勝寺のご先代鶴見ご
貫主が2.5ヘクタールの土地を払い下げ、50戸の家を建ててスリランカ政府に寄付しました。贈呈式の時、偶々幼稚園に「居候」していて、ご名代の、今の橋本御前さまにくついでに行きました。あの賑やかなお祭りを、昨日のようにはつきりと憶えています。もう19年目だそう

です。「日本からのお客さんです」というアンギーさんの声に、皆さん集まってきた。心から喜んで下さいました。当時を知っている人も多く、急いで家に行つて鶴見御前さまの写真を持ってきてくれました。村はツルミ・ガマ、つまり鶴見村というそうです。